

第6学年 道徳学習指導案

日 時：平成29年9月29日（金）5校時
児 童：第6学年
指導者：

- 1 主題名 郷土を愛する心【C-(17)伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度】
- 2 資料名 直訴の決意（釜石市教育研究所編 H13）
- 3 主題設定の理由

(1) 価値について

高学年の内容項目C「主として集団や社会との関わりに関すること」の(17)に「我が国の郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつこと。」とある。これは、我が国や郷土の伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国や郷土を愛する心をもつことに関する内容項目である。

この内容項目は、低学年の内容項目C(15)「我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着をもつこと」、中学年の内容項目C(16)「我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、国や郷土を愛する心をもつこと。」を受けたものであり、中学校の内容項目C(16)「郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。」へ発展していくものである。

児童にとって、生まれ育った郷土はその後の人生を送る上で心のよりどころとなるなど大きな役割を果たすものである。また、郷土は生きる上での大きな精神的支えとなるものである。また、この時期の児童は自分たちが育ってきた地域の特徴や歴史を学ぶことで、その良さを知識として得たり、地域の人々との関わりの中から郷土に親しみを感じたりするようになり、郷土への愛着や誇りをもつようになっていく。

郷土に誇りを持ち、自分もそれを継承し発展させようとする態度を育てるためにも、郷土のために努力した先人の生き方に触れることは大変意義深いことであると考ええる。

(2) 児童について

6年生の児童は、大変素直で仲が良く、みんなで協力し合って生活している。最高学年として、全校の手本になろうという自覚をもって、様々な活動に主体的に取り組んできている。また、自分たちの住む橋野町や栗林町に愛着をもって生活している。

児童は、昨年度、総合的な学習の時間に地域の偉人である大島高任の学習を行い、「たたら製鉄」を体験した。これは、先人の苦労や思いに触れ、故郷への誇りをもたせる貴重な体験となった。また、各地区で受け継がれている郷土芸能にも一生懸命取り組んでおり、運動会や地域のお祭りでは継承者としての一翼を担っている。

しかし、様々な知識や体験はあるものの、それは表面的な理解にとどまっていることが多く、先人達の偉業の意味やその思いを深く考え、共感したり感動したりする経験が十分であるとは言えない。さらに、自分たちがこの地域を受け継いでいくという意識もまだ低い。

これらの実態から、村のために命をかけた古里嘉惣治の葛藤や思いをじっくりと考えさせ、故郷の先人のすばらしさを再認識させることで、故郷を愛し誇りに思う心をもたせたいと考えている。さらに、自分たちがこの郷土を守り、受け継いでいくという心情や態度を育てるための一助にしたいと考える。

(3) 資料について

資料「直訴の決意」の内容は、次のとおりである。

延宝2年、橋野村の肝入りである古里嘉惣治は、地頭である楓助左衛門の横暴ぶりに苦しむ村人の様子に心を痛め、南部の殿様への直訴を考える。直訴をするかどうかで悩むが、故郷を守りたいという思いを強く抱き、直訴を決意する。その後、老名^{おとな}である小屋野十三郎に直訴の準備を進めていることを知られ、全てを打ち明ける。十三郎も一緒に直訴を行うことになり、二人は南部の殿様への直訴を執行する。二人の訴えは聞き入れられ、楓助左衛門は切腹になり、橋野村は救われるが、直訴の罪で二人は捉えられ死罪となる。橋野村の人々は二人の偉業を称え、墓を建てて手厚く葬ったのちに桜の木を植え「義人桜」として供養してきた。現在、荻の洞には二人の碑が建てられ、後世に語り継がれている。

本資料には、村を救うために直訴を決意するまでの嘉惣治の葛藤や苦悩が描かれている。ま

た、故郷を愛する嘉惣治の思いも所々に描かれ、嘉惣治が最終的に直訴という決断に至った背景には、橋野村の人々と郷土を深く敬愛する心情があることがわかる。

現在の児童にとって、直訴や一揆という行為は歴史上の知識でしかなく、実感を伴った理解や自分と重ね合わせて考えることは難しいと思われる。しかし、「故郷を思う気持ち」は時代を越えて全ての人々が共有できる感情であり、嘉惣治の郷土を思う気持ちの強さに共感させることは可能であると考えられる。

本資料では、「命を投げ出して直訴に踏み切った功績」の意味を考えさせるのではなく、「直訴に踏み切った根底には、深い郷土愛があった」ということに共感させ、自分たちにも同じような思いがあることに気付かせていきたい。そして、自分たちの郷土に自信と誇りをもたせるとともに郷土をさらに守り発展させていこうとする思いに繋げていきたいと考える。

(4) 他の教育活動などとの関連

児童は、4月から運動会に向けて郷土芸能に取り組んでいる。その中でリーダー的な立場に立つことにより、郷土芸能を守り受け継がなければならないという意識をもつことができている。また、1学期には、資料「花かげの花守りたち」の学習で自然を守ることについて学び、その背景には郷土を愛する心があることに気付くことができた。そして、その学習の後に行った行事「和山植樹」を通して、故郷の自然を守ることの大切さとともに、故郷を守っていききたいという思いについて実感をもって感じ取ることができた。

2学期には総合的な学習の時間の中で、地域の偉人達の一人として古里嘉惣治と小屋野十三郎の調べ学習を進め、二人の功績を学んでいる。本時の道德の時間では、資料を通して二人の思いについて話し合うことで、「故郷を愛する心」に焦点を当てながら考える時間としたい。さらに、学習発表会では、学習したことを生かして古里嘉惣治の劇に取り組む予定である。また、12月には、そば打ち体験を行い、地域の人々との触れ合いを通じて、地域の良さに触れる予定である。

このように、1年を通じて地域の自然や文化・歴史に触れる学習や体験的な活動を通して、地域を愛し守り続けていこうとする心情と実践的な態度を育てていきたい。

4 資料分析図

主要場面	心の動き	気付かせたいこと	主な発問
<p>古里嘉惣治は、地頭の楓助左衛門の悪政に対し、やめるように訴え続けたが聞き入れられず、どうすればよいか一人悩み続ける。あるとき、山の上から故郷を眺めながら、故郷の美しい光景を思い浮かべていた。そして、くちびるをかみしめ直訴を決意する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・このままでは村が滅んでしまう。 ・もう直訴しかない。 ・直訴は死罪になる。 ・家族を巻き込むことはできない。 ・美しいこの橋野村を守りたい。 ・この村の自然、景色が大好きだ。 ・この村の人々を守りたい。 ・この美しい光景を守りたい。 	<p>村を救う方法は直訴しかないのだが、直訴をすれば自分のもとより家族も死罪になってしまうことから、嘉惣治はどうしてよいか悩み続けている。しかし橋野村の美しい光景を思い浮かべ、愛する村を守るために直訴を決意する。</p>	<p>○嘉惣治はくちびるをかみしめながらどんなことを考えているでしょう。</p>
<p>小屋野十三郎は、嘉惣治が直訴の決意していることに心を打たれ、自分も一緒に直訴をすることを決心する。 二人は涙を流し、固い握手を交わす。</p>	<p>【十三郎】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・嘉惣治さん一人を死なせるわけにはいかない。 ・私も共に直訴をしよう。 <p>【嘉惣治】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十三郎さん、共に直訴を成功させよう。 	<p>直訴を決意した二人には一切の迷いや不安はなく、「橋野村を救おう」という強い意志で結ばれる。</p>	<p>○十三郎は、どんな気持ちで一緒に直訴をしようと言ったのでしょうか。 ○固い握手を交わした二人には、どんな思いがこみ上げていたでしょう。</p>

5 本時の指導

(1) ねらい

古里嘉惣治が直訴にふみきるかどうかを悩み抜いている姿を考える学習を通して、嘉惣治や十三郎が直訴を決断した背景には故郷やそこに暮らす人々を愛する深い思いがあったことに気付かせ、先人達の思いによって守られ受け継がれてきた郷土に誇りをもたせるとともに故郷を愛し守り続けていこうとする心情を育てる。

(2) 展開の概要

段階	学習活動と主な発問 (○)	期待する児童の反応 (・)	指導上の留意点 (*)
気づく 5分	<p>1 郷土の偉人で知っている人を発表し合う。 ○この地域の偉人にはどんな人がいますか。</p> <p>○嘉惣治と十三郎は、どうして命をかけてまでも直訴にふみきったのだろう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>嘉惣治と十三郎が、命をかけてまでも直訴にふみきったのはなぜだろう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大島高任 ・ 古里嘉惣治 ・ 小屋野十三郎 ・ 鞭牛和尚 ・ 三浦命助 ・ 村人達を救うため。 ・ 村を守るため。 	<p>*総合的な学習の時間に調べた古里嘉惣治について切り返して行く。それ以外の人物については業績などに触れる程度とする。</p> <p>*嘉惣治が直訴をした理由を考えさせ、本時の課題へと繋げていく。</p> <p>*単に「村人を救うため」という理由で命を捨てることができるのかという視点で問い返し、心の奥にもっと深い思いがあることに気付かせ、話し合いの方向付けを図る。</p>
深める 15分	<p>2 資料「直訴の決意」を読んで話し合う。</p> <p>○「くちびるをかみしめ、大きく息を吸い、天を見つめた」嘉惣治はどんなことを考えているでしょう。</p> <p>○嘉惣治の決意を聞き、自分も一緒に直訴をすることを決心した十三郎はどんな気持ちなのでしょう。</p>	<p>【決心】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 直訴することを決意した。 ・ 橋野村を守るためにこの命を捧げよう。 <p>【迷い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 直訴は死罪になる。 ・ 妻や子どもも死罪になる。 ・ うまく行く保証はない。 <p>【根底にある思い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ この村の人々をなんとしてでも守りたい。 ・ この美しい村を守りたい。 ・ この景色がいつまでも続いてほしい。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 嘉惣治一人を死なせるわけにはいかない。 ・ 一人より、二人のほうが心強いはず。 ・ 私と一緒にこの命を捧げよう。 ・ 私の思いも嘉惣治と同じ。 	<p>*範読の後、当時の状況を簡単に確認する。</p> <p>*嘉惣治が直訴を決意した場面が、この場面であることに気付くことは、それほど難しくないと思われる。さらに、そう決断した背景には「橋野村の人々の姿」「橋野村の美しい光景」など「橋野村そのもの」を愛する心があったことに気付かせる。</p> <p>*直訴を悩む背景には、残された方法は直訴しかないのだが、直訴には「自分は死罪」「家族も死罪」「直訴自体が難しい」「直訴が認められる保証がない」などのリスクがたくさんあり、その狭間で葛藤する嘉惣治の苦しみも考えさせたい。</p> <p>*嘉惣治の思いに胸を打たれた十三郎の心情を想像させ、橋野村を愛しているという本質的な部分は嘉惣治と変わらないことに気付かせる。</p>

<p>つかむ</p> <p>12分</p>	<p>3 本時の課題について話し合う。</p> <p>○涙を流しながら固い握手を交わした二人には、どんな思いがこみ上げていたでしょう。</p> <p>○嘉惣治と十三郎が、命をかけてまでも直訴にふみきったのはなぜですか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・二人と一緒に直訴を成功させよう。 ・この命に代えても、橋野村を救おう。 ・いつまでもこの美しい橋野村が続いてほしい。 	<p>*二人の思いが同じであること、また、その決断には不安や迷いが全くないと感じ取らせ、ふたりの固い意志と絆の深さに気付かせる。</p> <p>*改めて本時の課題を問い、本時のまとめを行うとともに、本時のねらいとする価値の理解を深める。</p>
<p>嘉惣治と十三郎にはふるさとを愛する心があり、その強い思いが二人を直訴へと突き動かした。</p>			
<p>広げる</p> <p>10分</p>	<p>4 古里嘉惣治と小屋野十三郎の生き方を学習し、感じたことを交流する。</p> <p>○今日の学習を通して感じたことを書きましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・古里嘉惣治が橋野のことを本当に愛していたことが分かって感動した。 ・地域のために自分の命を投げ出した嘉惣治と十三郎はすごいと思う。 ・自分たちもこの橋野や栗林を守っていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> * 嘉惣治や十三郎の生き方から感じ取ったことを「心のきせきノート」に書かせる。 * 自分の考えをもたせるといってねらいでノートに書かせる。 * 友達の感想と自分の書いた感想を比較した上で感想を口頭で発表するよう促す。
<p>まとめる</p> <p>3分</p>	<p>5 古里嘉惣治と小屋野十三郎の石碑を守っている地域の人の手紙を聞く。</p>		<p>* 地域学習で講師を務めてくれた藤原さんからの手紙によって地域の人々の思いを伝え、自分も地域の一員としてふるさとを守っていこうという思いをもたせる。</p>

(3) 板書計画



二人は涙を流しながら、固い握手を交わしました。

二人で直訴を成功させよう。

この命に代えても、村を救おう。

この村がいつまでも続いてほしい。

直訴しよう。

この村を守りたい。

村の人々を守りたい。

↓

直訴は死罪
家族も死罪
うまくいく保証はない



直訴を決意

くちびるをかみしめると、大きく息を吸い、天を見つめました。

嘉惣治と十三郎にはふるさとを愛する心があり、その強い思いが二人を直訴へと突き動かした。

直訴の決意

古里嘉惣治 なぜ？直訴できた

小屋野十三郎 村人を助けるため

嘉惣治と十三郎が、命をかけてまでも直訴にふみきったのはなぜだろう。

延宝二年 今から三百五十年前
楓助左衛門の悪政に苦しめられる

古里嘉惣治 一人悩む日々が続くのでした。